郷土史 ていね

第 37 号
平成 23 年 1 月 12 日
手稲郷土史研究会会報

第 56 回（平成 22 年 12 月 8 日）定例会の講演要旨

「昭和 25 年の雪像つくりから曙の彫刻《颯》へ」

造形作家　　渡辺　信　氏

渡辺氏は石狩町出身で、現在手稲に在住、道展会員として御活躍されている。この度、学生時代、そして指導者として“さっぽろ雪まつり”の歴史と雪像づくりの体験談を混え、長時間にわたり貴重なお話を聴かせていただきました。

これまでの作品としては、札幌市北区水道局北庁舎モニュメント製作“水炎”、新千歳空港国際ロビーレリーフ製作“雄翔”外多数。特に手稲曙温水プール東側公園に設置されている彫刻《颯》は手稲の地にふさわしい躍動感にあふれ、見る人の心を奮いたたせる作品である。

毎年、作品製作のほか、“さっぽろ雪まつり”開催時に製作される市民雪像の技術指導を行っている。

“さっぽろ雪まつり”は、当時札幌観光協会主事であった近藤氏が、昭和 10 年頃、小樽の北手宮小、長橋小の校庭で子供達が雪像を作っていたものにヒントを得、市民にうるおいとレジャー等、札幌の目玉に出来ないものかと考えられた様である。

その頃の大通りは失対事業の為か雪捨て場であり、黒い雪が積んであったと言う。

第 1 回雪まつりは、昭和 25 年に開催されたが、その間学生であった渡辺氏は“ミロのヴィーナス”、“かがり火を持つヴィーナス”、“大鵬の土俵入り”、“ガリバー像”等を制作され、好評を得ている。

特に第 30 回記念には、岡本太郎氏デザインの「雪の女王」を制作して話題をまいた。腹案をもって上京し、岡本氏に会ったり、12～3m の雪を積み、毎夜、深夜までつくりあげたものと語る。

平成 23 年 2 月に第 62 回“さっぽろ雪まつり”が開催される予定であるが、雪像の原点は、幼い頃作った素朴な「雪ダルマ」であることを決して忘れてはならないと、又雪像は遠くからながめるものばかりではなく、中を通れたり、さわれたり、そこで思わず歌が生れてくるような親しみあるものがいっぱいできればと思うと、そして北国の国土と詩を満喫できればと、（裏面へ）

第 56 回（平成 22 年 12 月 8 日）定例会の研究発表

学校環境つくりについて

前田　　菅原　直　氏

自分の行く道は教員と志、昭和 43 年留萌市立小学校教員を皮切りに、46 年手稲西小学校に転任、鉱山通りにあった道職員住宅に住まいして通勤された。その時は小中同教室であり、徐々に児童が増えて体育館を区切り使用しての勉強とか、いかに急激な人口増であったかが伺えられる。

又手稲金山鉱山のお話をされたが、我々会員も鉱山歴史の研究をしている処であり、なぜか講演に親しみが感ぜられ、知りうる回想をお願いしたい。

手稲の明治・昭和にかけ 42 年札幌市に合併されて一層伸び、手稲区になって計 16 校の開校となり、急速な都市化を年歴表に詳細に記されており、会員皆さんも知らざる事を回想されたと考えられます。

旧宮の沢追分地区は水田が多く 30 年頃まで、今の桜井通りは農道のみであった。こうした光景が一変して 55 年以降宮の沢地区はマンションを含む急激な団地の造成による住宅増強と JR 駅の新設で一挙に人口が増え、平成初年に宮の沢小学校新設準備にかかり 2 年 3 月に開校された。学校設置は北緯 43 度 6 分 16 秒・東経 141 度 15 分 52 秒・標高 6 メートルと話されたが、宮の沢神社海抜度標を埋設してあるのが記憶に蘇える。

この学校の発展に常日頃前向きに対処、教師として大義を解明されるなど、知らざる近代学校の進行推移の難しさが聞き取れました。幾多の難関に対処して、最後に成し遂げた栄冠は何物にも変えがたき喜びを残されたと思います。

定年長期に渡り弛まざる貢献に敬意を表し、本当にご苦労様でした。　　（文責：平木重男）

次回の予定

次回（2 月 9 日）は、会員の研究発表で、小田真二氏の「小説に見る手稲」と釣本峰雄氏の「石狩・手稲の交通網」を予定しております。

＝ ◇ ＝ ◆ ＝ ◇ ＝ ◆ ＝ ◇ ＝ ◆ ＝ ◇ ＝ ◆ ＝ ◇ ＝

（表面より）今後手稲地区に於いても、雪の中で子供達と一緒に遊べる雪まつりの様なものの開催等あっても良いのではと御提案ありましたが、現在手稲山での“雪の祭典”が 18 回目を迎える様であるし、又平成 23 年 2 月 19 日（土）～20 日（日）には第 3 回“雪っていいね・ていね”が鉄北広場にて開催準備中であり、区民の雪像作りや、ラフティングボート、よさこいソーラン演舞等で有り、一区民として、又、ボランティの一員として成功することを願っている。　　（文責：久野木茂雄）